



Title	「青山光二(1913～)」
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 31-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

追悼文を読む

「青山光二 (1913～)」

長原しのぶ

作家太宰治が「無頼派」として文壇に位置付けられるのは奥野健男の「無頼派」の再評価——太宰・坂口・織田・田中らをめぐって」（『日本読売新聞』一九五五・一一・二二）が発表された後とされる。しかし、奥野が「昭和二十二、三年頃、無頼派という言葉が、すでに出来ていた」（『日本文学の戦後』一九七二・五、読売新聞社）と指摘するように太宰に対する「無頼」という表現は太宰自身の言葉も含め（『返事の返事』△東西一九四六・五）、その死後を前後して確認することが可能だ。そんな中、太宰に強固な「無頼」精神を見出した一人が青山光二である。織田作之助と深い親交を持つ青山は織田という存在を通すことによって太宰に内在する「純血無頼派」（『純血無頼派の生きた時代——織田作之助・太宰治を中心に』二〇〇一・九、双葉社）の血を見たのである。

織田と太宰の共通性に関して青山は、「死」と「芸術」に着目する。当時、青山は太宰の晩年の様子から「死と隣り合はせて仕事をしてみた」「ヴィヨンの妻」「おさん」と近來にはかに仕事の上に死の翳が濃くなったと感じ取り、「グッド・バイ」（『朝日新聞』一九四八・六）連載時に心中した直後、太宰の「死」に対して「連載から逃れるため」（『文士風狂録——青山光二が語る昭和の作家たち』二〇〇五・一二、筑摩書房）と一応の理由付けを行っている。だが後に、その「死」を改めて冷静に分析することで「太宰治追悼特集号」（『文芸時代』一九四八・八・二）に「白い手」という文章を寄稿する。この「白い手」とは「ほとんど現実生活に生活してゐる者の手とも思へない」太宰の「手」を指しており、そこには織田の「死ぬしかない生き方の許容」に通じる太宰の「死への親近感」を同質のものとして捉えた反俗的実生活のあり方が見据えられている。「白い手」の冒頭、「太宰治の「情死」の「真相」に触れたい人は、「雌について」といふ彼の初期の文章を読まれるとよい」と語る青山は「雌について」（『若草』一九三六・五）の中に「暗い苦しい青春のともしび」と「暗い救い」を指摘し、「死」に牽引される中で苦悶せざるを得ない太宰の「生」の有様を読み取る。このような太宰の「死」の意味から青山は太宰の作家としての類稀な存在感を感じ取り、その血肉化した「芸術」を「無頼」という一つの枠組みで捉えるのである。

雑誌「海風」の同人であった青山は初期太宰作品からの読者であったがその作品評はほとんどなく、「斜陽」（『新潮』一九四七・七・一〇）について「太宰の才筆にしてなほかつ貴族を描かうとすれば失敗する。

くだい日本に貴族なんて階級はありはしない」(『創作月報 改造・文学界・新文学』△「文芸時代」一九四八・五・一)と設定そのものの非現実性に疑問を呈するものが管見される。戦後になり自身も作家活動を本格化させる中で各作品の細かな箇所に関しては様々な批評意識を持っていたことを窺わせるが、その一方大枠で時代の中に見据える作家太宰治の〈芸術〉については高い評価と関心を寄せていたといえる。太宰に見出す〈芸術〉を青山は、「私は人に接する時でも、心がどんなにつらくても、からだがどんなに苦しくても、ほとんど必死で、楽しい雰囲気を作る事に努力する。(中略)小説を書く時も、それと同じである。私は、悲しい時に、かへつて軽い楽しい物語りの創造に努力する」(『桜桃』△「世界」一九四八・五)の一文から織田に通じる独特の「ダンディズム、含羞の精神」(『太宰と織田』△「織田作之助選附録第五号」一九四八・六・二二)を導き出し、そこに「無頼派」の基本的態度を指摘する。青山の捉える「桜桃」に表された太宰の精神は「虚構の春」(『文学界』一九三六・七)以降太宰文学に一貫して底流する「なんぢら断食するとき、かの偽善者のごとく、悲しき面容をすな」(『マタイ伝六章一六節』)の体現であり、太宰の芸術家精神の根幹に関わるものである。そこを重視する形で青山が太宰作品とその作家姿勢に新たな光を刺したことは注目できる。その証左の一つが志賀直哉批評である「如是我聞」(『新潮』一九四八・三・五―七)に対する青山の捉え方である。戦後文学を「田舎浪人的」「チャンバラ好み」と切り捨て、新人の作家姿勢と決意に対するある種の「制約」の中に押し込められた生温さを感じ、「死ぬ気で書かなければ、いまの時代を切り抜けることは到底不可能」(『太宰と織田』一九四八・六・二二)と現状を憂う青山の目には「死」を賭して〈芸術〉に邁進した太宰の姿がはつきりと映っていた。青山は、「如是我聞」を単なる志賀批判、文壇批判と解釈するのではなく、「方法のない日本の文学に方法の觀念を導入すべきことを強烈に主張」する「民主革命」(『敗戦と志賀直哉』△「文学会議」一九四九・四・一)であると評価し、戦後の新たな旗手となるべき一つの大きな存在としての太宰に期待と賞賛を与える。ここに「無頼派」として新たな地位を獲得していく太宰の礎を築く役割を青山が荷っていることが改めて確認されるのである。